

DIALOG IN THE DARK

D I A L O G
I N T H E
D A R K

×

こども環境会議

DID2007東京アフターセッション トークセッション&ワークショップ

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク 2007 東京を振り返って」
～昔の放課後、これからの放課後～

日時: 2007年12月20日(木) 14:30～17:00

場所: 東京都港区赤坂区民ホール

協力: 港区赤坂地区総合支所・TBSラジオ & コミュニケーションズ

【第一部 トークセッション】

出演者 志村 季世恵(こども環境会議代表 DID理事)

松村 道生・檜山 晃・木下 路徳(DIDアテンド) 司会 金井 真介(DID代表)

【第二部:ワークショップ】

DID2007東京参加者の方々 ファシリテータ 志村 季世恵(こども環境会議代表)

これは、2007年12月に開催されたDIDアフターセッションの報告書です。

これまでDIDを続けていく中でずっと気になっていたことがありました。

ダイアログのまっくらな中では、見知らぬ参加者同士が、短時間で親密になり、共に安心したり楽しくなったりします。しかし、その参加者が明るいところに出てきた途端、よそよそしい元の距離に戻ってしまうのです。どうして「見える」と元に戻ってしまうのだろう? 「見える」とは、どういうことなのだろう?

人は、暗くても明るくても対等に対話できるのではないか、そんな想いでアフターセッションを企画しました。

参加者の方々が限られた時間の中で真剣に考え、話し合ってくくださった記録を拝見しているうちに、これを皆様と共有したいという想いが強くなっていきました。

そして、ダイアログとこども環境会議とが協力してアフターセッションの様子をこども環境会議通信の増刊号として形にすることになったのです。

DIDアフターセッションに参加してくださった皆様、そしてこの実現にご尽力頂いた港区赤坂地区総合支所、TBSラジオ&コミュニケーションズをはじめ多くの実現に向けてご支援頂いた皆様に深く感謝申し上げます。アフターセッションでお聞かせ頂いたご意見が具体的な行動につながり、様々な形で社会に広がっていくことを願っています。

DIALOG IN THE DARK
代表 金井 真介・スタッフ一同
shin@dialoginthedark.com

1. 第一部 トークセッション「90日間の発見」

DIALOG
IN THE
PARK

トークセッションに入る前に、まず目の不自由なアテンドと参加者との隔たりをなくすためにいくつか約束事を決めました。たとえば、手を挙げる代わりに、拍手をする。「DIDに参加したことのある方？」という司会の質問に対して、会場の方は拍手で応えます。「男性の方？」「お子さんはいらしてますか？」拍手の様子で壇上にも会場全体の雰囲気伝わっていききました。

さて、その壇上には4名の話し手が並びます。DIDアテンドを代表して、隊長こと松村さん、ひやまっちこと檜山さん、きのっぴーこと木下さん。そしてDID理事、こども環境会議代表でもある志村季世恵さん。今回90日間続いたDIDのエピソードを中心になごやかに話は進みました。

季 『みんなに通じる「学校」のイメージってさ！？』

ひ「学校の“匂い”の記憶はみんな結構共通なんだね。クレヨンや糊のにおいとか」

隊「足元に対してもみんな同じところで盛り上がっていた。体育館の床の感触とかキュキュっていう音とか」

季「学校は皆知っている場所。みんな懐かしい記憶を持っている。暗い中であるものがわかった瞬間、当時の記憶と繋がり頭を巡るのね」

ひ「楽器を鳴らしたり、振り回したり。暗いと大人でもできるのだけど」

隊「明るいと恥かしくてできないんだよ。見られていない安心があるのじゃない？」

き「いや、人の目が届かないところって、みんなワクワクですよ(笑)」

季「前に、枯れ葉を食べた人がいたよね！アテンドはみんな五感の全てを使っている、日常的にアテンドはよく『見る』という言葉を使うけれどあれはどういう意味なの？」

隊「わかるという意味かな」

ひ「イメージを頭の中で構成すること」

き「触って理解して、記憶を探っていくということかな」



季 『そうそう、ボール遊んで大人もやっぱり楽しいんだね』

き「ボールを転がしてみましよう、というと、みんな『え〜っ』っていう。でも、すごく楽しんでもらってたよね」

ひ「音がするボールがだんだん近づいてきて、くるなーって感じもうれしいし、楽しいし」

季「赤ちゃんとボール遊びをすると、ボールを待ってる間も手足をバタバタさせてうれしそうなの。あの感覚と似ているかも。暗闇の中ではこういうシンプルなことも楽しいと感ぜられるのね」

季 『人の温かさを感じると遊び心が湧いてくるのかな？』

隊「大の大人が、他人と手を取り合う温かさに感動していた。そうしたちょっとしたことを楽しめることに気がついた時にスイッチが入るみたい」

ひ「それはひとりぼっちじゃないという安心感なのかな？」

き「あまりこちらが予想していなかったところでみんな感動するよね」

ひ「そう大人の決めた通り子どもは感動したりしないもの。大人も遊び心が大切。そして大人が自分の中に常にこども心を持っていることが日常を楽しむ秘訣だとダイアログの体験者から教えてもらった気がする」

【当日のトークセッションより抜粋】

2. 第二部 ～ワークショップ～

DIALOG
IN THE
DARK

第二部は、まず会場の照明を落として真っ暗な空間を作り、皆で暗闇を共有することから始まりました。そして、前後左右の人と握手して自己紹介。

真っ暗な中でのコミュニケーションを体感します。照明が明るくなると、次はグループに分かれます。進行役が問いかけた4つの質問に対して皆さんたくさんの意見を出していただきました。ごく一部ですが、この空間から生まれた素敵な言葉の一部をご紹介します。

進行役 こども環境会議 志村 季世恵

質問その1 DIDに参加して気がついたことは、何ですか？

暗闇は怖くない、ということ。人の声の温かさ。まっくらな中での会話が楽しい。誰かがいるという安心感。気配を感じる、ということ。普段、視覚以外はあまり使っていなかった。握手した瞬間に和らぐ感覚。手すりや壁のありがたさ。アテンドってすごい。小さい頃の自分の感覚。72年前の赤坂小学校の思い出。人と近づくのがいやじゃないという感覚。助け合い、協力が大切だということ。これからは人に優しくしよう。

質問その2 DIDを体験して感じた、今の世の中に必要なことって何でしょう？

自分の感覚。自分自身で楽しむ気持ち。立ち止まるゆとり。協力関係。声を掛け合うこと。他人に対する意識。程よい距離感。人の話を良く聞くこと。分かち合う、ということ。人の優しさ。安心感。子ども力。視覚以外の価値。フラットな場作り。わかったふりをしないこと。…

質問その3 子どもたちは今、どうなっていると思いますか？

外で遊ばない子が多いように思える。体の使い方がヘタ。人付き合いが苦手なのは。はみ出すことに対する罪悪感が強いみたい。余裕がない。違う年齢の付き合いがない。地域の中で子どもを育てる環境がない。子どもの居場所がない。習い事が多くて楽しいことをする時間がない。辛い立場の子どもが多いのでは。制限しすぎ。大人が押しつけすぎ。子どもは変わらない。大人が過保護になっている。

質問その4 大人たちは子どもたちのために何をしたらいいと思いますか？

大人の生き方を伝えていく。まずは大人が日々の生活を楽しむ。お父さんがもっと子育てに協力できるようにする。親だけでなく、みんなで育てるという意識が大切。近所同士で見守る。声をかける。接点を持つ。手放すではなく目をかける。いい意味でほったらかす。自分で責任を取る覚悟を教える。いろいろな大人をみせる。多様な価値観を伝える。遊ぶ自由を与える。失敗しても大丈夫だと感じられる場を作る。実体験を大事にする。

■ ワークショップを終えて

ダイアログを体験した人は一様にまっくらな中でこれまで知らない同士が急に相手への思いやりが持てフラットなコミュニケーションが出来たことに驚かれます。ただ明るいところに出てくるとすぐに元の関係に戻り白けてしまう。見えるって何だろう？今回アフターセッションでは明るい所で真剣に子供や社会に対し考え、対話しているのを見ていると人は暗くても明るくても対等に対話できることを実感しました。



3. アフターセッションを終えて

～参加者の感想から～

DIALOG
IN THE
DARK

DID2007東京に参加した9000名の参加者は、偶然同じユニットになった人とは対話できなかった。しかし、明るいところで再び同じダイアログを体験しているというだけで安心した空間が生まれた。そしてそれぞれ普段考えていることをなんの照れもなく話せたことがとても嬉しかったと後に参加者の声を多くいただきました。その中から一部を紹介します。(敬称略)

【新しい気づき、つながる気持ち】

ダイアログ・イン・ザ・ダークの体験はいろんな感覚を刺激してくれる。それは誰かと共有したいという疼きにも似た思いがあふれ出てくる。こうした思いに応えるDIDアフターセッション。言葉で伝え合う営みを通して、新しい気づきとなって、参加者同士の気持ちがつながり合う。真っ暗闇なDIDでは仲間の顔はわからなかったが、アフターセッションで顔を見ながら話し合っていると、こんな顔をしてイン・ザ・ダークでダイアログしてたんだなという思いがフワ〜ッと広がった。これまた楽し。

月刊ニューメディア編集長 吉井 勇

【ダイアログで感じたこと、気がついたこと】

1. 良い人達との出会い。
2. 積極的に社会と関わるには常に愛する心と感謝の気持ちを忘れないこと。
3. 困難や災難に遭遇しても忍耐する力を養うこと。
4. 身体を使うことで発達すること。
5. 人との絆 など。

赤坂丹後町内会会長 杉山 晏

【新鮮な視覚以外の感覚体験】

私たちは子供と一緒に入ったのですが、そのせいか、ちっとも怖くありませんでした。第一に、子供たちはすぐに慣れて、むしろ感覚のズレを楽しんでいるようでした。その声を聞いていると、大人たちも同じようにわくわくしてきました。私たちは、物を見るところだけで何か理解して了解しているように考えてしまいがちですが、触ったり聞いたりすること、それと、匂いとか、味わいとかもこんなにかんじているのだと実感出来たのがとても新鮮でした。私も彫刻という分野で作品を作り続けていますが、視覚以外の感覚の役割をとっても重要だと感じています。そして、それは何か特別な配慮をしなければ、つまり、反省的にしか自覚しにくくなってきているのでは無いかと思います。

港区立赤坂小学校PTA会長・彫刻家 八柳 尚樹

4. ダイアログアフターセッションを終えて

～対談～

DIALOG
IN THE
DARK

ダイアログ・イン・ザ・ダーク 代表 金井 真介

×

こども環境会議 代表 志村 季世恵

1 ダイアログ・イン・ザ・ダークとの出会い

司会

ダイアログ・イン・ザ・ダークとの出会いについて聞かせてください。

金井

1993年、ドイツのダイアログを紹介する新聞記事を読み、衝撃を受けました。何も見ることの出来ない空間の中で、普段助けようと思っている人に助けられ、立場が逆転してしまう、「目で見せない展覧会」！ぜひ、日本でもやってみたいと思ったのです。

司会

ダイアログ・イン・ザ・ダークは「暗闇での対話」ということですよね。そういうことに金井さんはもともと興味があったのですか？

金井

全くありませんでした。普段は無口だし、当時、自分がしゃべることといったら命令と指示のみ！（笑）あの頃の自分は立場とかパワーバランスを前提として人と接していたんです。だから人と人が利害関係なく会話を楽しむということを知らなかった。今から考えてみればそんな自分だったからこそダイアログを必要としていたのかもしれませんが。ダイアログを通して「人との関係の中に対等というものがある」と頭ではなく心の奥で理解することができました。

司会

では季世恵さんとダイアログ・イン・ザ・ダークとの出会いは？

季世恵

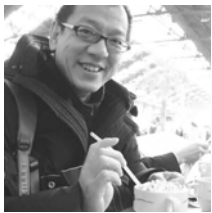
私は、金井さんからダイアログの説明をされて「日本でもやりたいのだけれどどうだろうか？」と聞かれました。それに対して人ごとのように「いいじゃない！楽しそうだね」って言ったの。すると「一日だけ手伝ってほしい」と言われ、一日だけ手伝うつもりが、いつの間にか10年が経っていました。金井さんの言う一日とはどうやら10年を言うらしいのね。

金井

僕は時間軸が人と違うから（笑）。ダイアログを日本でやるとどうなるのか想像がつかなかったんです。もしかしたら暗闇を怖がる人もいるかもしれないしパニックになる人がいたら…。そんな心配もあったからセラピストである季世恵さんの手助けが必要でした。でも本音をいうと、季世恵さんは遊びの天才でまるで子ども以上に子どもらしい大人。あるとき頬っぺたに絆創膏を貼っていたので「どうしたの？」と聞くと「目を瞑って自転車を漕いでいたらこけた」と。

司会

え～！



金井 真介：
ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン
代表。
コンサルティングファームフェロー等
を経て1999年からダイアログ・イン・
ザ・ダークの日本開催を主催。



志村 季世恵：
こども環境会議代表。
ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン
理事。誕生から臨終までを見つめる
パースセラピスト。今まで行ったセッ
ションは5万回を超える。

金井

他にも、雨の日に水溜まりを見つけるとわざとハイヒールを脱いで跳び跳ねて「うあ、うへへ、どろどろ！」と満面の笑み。本人はまるで普通のようにだけけれど、こんな大人は自分にとっては驚きだったんです。この子どものように五感をフルに使って生きている感覚がダイアログに必要なだと直感しました。

司会

そんな季世恵さんが、ダイアログで気づいたことは？

季世恵

沢山あります。ダイアログって人の本質的なことにとても添っているイベントなのです。私は心にトラブルを抱えた人をケアするのが仕事です。例えば突然にガンの末期であることを告げられるとか、ある日リストラされてしまうとか、大きな困難を目の前にして苦しんでいる人と向き合っています。どう解決していくのかは人それぞれですが共通点の一つあって、自分に起きている拒みたい現状を受け入れると、そこから解決策が見えてきます。

これと同じ様なプロセスがダイアログの中にもあります。それは真っ暗な中ではどう頑張っても見えないのに、目を使って見ることをしばらくは諦められないということ。ところが時間がある程度経ってくると「やっぱり目は使えない、諦めよう」と視覚を手放すときが訪れます。すると突然他の感覚が開き出すの。耳や鼻、触覚など体全体が作動し始めるのです。

司会

なるほど、困難を受け入れると何かが開くのですね。自分が固執していたものを手放すって難しいですけど、ダイアログ・イン・ザ・ダークではそれが別の形で体験できる。

季世恵

そうなの。この感覚を知っていると何かあったときに本当に役立ちます。人はどんなときでも次がある、みたいなね。

司会

他には？

季世恵

アテンドの人たちは、すべての感覚を使って情報を把握するということですね。真っ暗な会場に入った参加者の中には「自分は迷ったのではないか？」と悩む人もいます。こんなときアテンドがその人のそばにやってきて「大丈夫ですか？」と声をかける。参加者は、言葉にしていないのにどうして自分の不安がわかったのだろう？と不思議に感じるのですね。

私自身も不思議に思って、あるときアテンドに聞いてみたの。そうしたら「不安なときは足音が変わる。歩幅が狭くなる。それに息遣いも少し変わる。ときには体温が上がる人もいる。だからわかるのですよ」と。目だけではなくて耳や皮膚感覚、あらゆる感覚を使っているのでしょうね。

金井

彼らは身体感覚が豊かですよ。これについては目が見えないから特別にある感覚なのだと人は思うかもしれないけれど、どうもそうではない。季世恵さんにもアテンドのような能力がありますよね。たとえば雪の降る前の空気の重さや、雨の前の湿度が体にまとわりつく感覚。それから春夏秋冬で違う夜の匂いを嗅ぎ分ける力。ついこの前、ダイアログの仕事が終わって会場の外に出たとき、まだ冬の寒さが厳しいのに季世恵さんとアテンドが「あれ！今日から春だ。夜の匂いが春になっている」なんて、会話している。普通だったら天気予報を基に空模様を判断したりするのに、そのような判断基準ではないのですね。僕も雲や月を見て予報を自分なりに立てることはあるものの、やはり視覚情報の一部です。でも「明日は雪だ。匂いが違う。音も静かになっている」と五感すべてでアテンド達と一緒に楽しんでいる季世恵さんを見ると、この身体感覚はアテンドだけにあるわけではないように思える。ひょっとしたら自分にもそうしたことが出来るかもしれないと、実は密かに研究中です。

2 こども環境会議のこと

司会

お二人はこども環境会議にも代表やスタッフとして関わっています。
こども環境会議を始めるきっかけは？

季世恵

私は、仕事を通じて大勢のお母さん達と出会っていく中で、核家族という形態が、今のお母さんや子ども達にもものすごく弊害を与えているのだなと思ったのです。それにご近所づきあいも殆どない、地域の支えもなく孤立無援のお母さんのストレスを何とかしたくて、こども環境会議を始めました。

金井

こども環境会議のイベントの一つに「大家族ごっこ」というのがあるのですが、僕が参加した当初は、軽井沢の森の中に家がありました。そこに7世帯くらいの家族や何人かの若い独身の人が集まり、まるで南の島の正月みたいにワイワイ同じご飯を食べ、そして檜の大きなお風呂に入ります。

あるとき何人かの子ども達と一緒にお風呂に入って遊んだのですが、このときは青く美しいもみじの葉が湯船に浮かんでいました。子ども達の中には色々な子がいて「金井さん、うちのお父さんとは違う場所に毛が生えているね！」なんて言ったり、背中を流してくれる子や、はたまた、もみじの葉を体中に貼り付け遊んでいる子もいる。やがて僕の体ももみじで飾られる！（笑）この体験は本当に楽しかった。以前の僕は「自分の子ども」と「他人の子ども」というように、関係性のあり方にどこか線を引いて境界を作っていました。でも、境目のない大家族の暮らしの中からこれまでにない安心感とか多様性を知った。大人である自分は、自らが作った既成概念や見えない境界線をなくすことがなかなか出来ないのですが、子ども達と遊びながら境界が溶けていく体験は新鮮でしたね。

季世恵

「境界線をなくす」って、ダイアログでも同じですよ。健常者と障害者と、弱者と強者という考え方をダイアログではなくそうと思っています。

司会

ダイアログとこども環境会議には共通点がありますね。

金井

そうですね。障害者や子どものことを「弱いから守らなくてはいけない」というふうには捉えていない。視覚障害者は確かに日常の生活を送るのに不便なところは沢山ある。でも工夫しながら習得した経験をダイアログで活かしてもらい、参加者がポジティブに社会と関わる方向にもっていくように気づかせることだってできるのです。

季世恵

子ども達も同じですよ。まだ体も心も発達途中だから大人とは違うけれど、脆弱なわけではないのです。色々なことを自分達で考え感じていく中で育っていく。そのチャンスを大人が取り上げてはいけないよね。

金井

同感。

季世恵

こども環境会議では子ども達に考えてもらう時間をよく作ります。ときには大人でも考え込んでしまうようなテーマを子ども達が考える。なぜこの世に飢餓があるのだろうとか、温暖化はどうしたらよくなるのだろうとか、小さな子ども達も含めて考えてもらうのだけど、ものすごくいい意見が出てくるよね。そういうことを見ると、子ども達にはちゃんとした自分なりの考え方があり、解決方法まで生み出すことが出来る。それを見て大人は驚きと共に子どもの底力に感動するのです。



大家族ごっこ:

こども環境会議の活動のひとつ
通称「キャンプ」
遊びや暮らしの達人を招いて行う
「衣食住実験創造制作室」プログラム
何世帯もの家族が集まり、ひとつの
大家族として寝食を共にする。
四季に関わる行事や、物作り、ナイト
ハイク、音楽会など、遊びの中で
多くのことを学んでいく楽しい時間。



3 アフターセッションについて

司会

今回、なぜアフターセッションを企画したのですか？

金井

ダイアログの場合、お互いを知らない8人が突然にチームを作り真っ暗な中に入って一瞬にしてうち解け共有感を持つ。ところが明るいところ、つまり日常に出てきた瞬間にまた距離が元に戻ってしまう。だから、明るい中でも共有体験が出来たり、一緒に考え対話したりできるということを提案してみたかったです。

季世恵

そう。暗い中で発見したことを「特異な体験をしちゃった！」だけで終わるのでは勿体ないですね。それを自分の日常に持ち帰って活かすことをして欲しくて。

司会

アフターセッションをやってみてどうでしたか？

金井

予想以上に、皆さんたくさん話してくださいました。普段から考えていたり、あるいはダイアログを体験して気づいたことはあるのでしょうか、それを誰かに聞いてもらったり話したりする場を作るというのは大切なんですね。

季世恵

普段はおざなりにしているけれど、本当は真剣に考えたいことって、たくさんあると思うのです。「後回しにしないほうがいい」と頭ではわかっているのだけど、なかなか向き合うチャンスがない。そこで改めて向き合う場を作れば、本当は頭の中にあるわけだから、当然だけどみんな意見が出ますよね。

金井

体験してから一度日常に戻った後、再び触発するってことだよ。ダイアログもリピーターが多いというのは、もう一度そこに来れば考えられたり感じたり出来ると思うからなのではないかな。だから、きっかけさえあれば明るいところでもみんなも真剣に対話できる。こんなふうに、普段から年齢も職業も様々な人達が世の中どうすればよくなるのかと考えてお互い確認できると、更に勇気も湧くよね。

季世恵

通常、ワークショップで話し合った内容を行動に移すレベルにまで進めるのは難しいことが多いのです。でも今回皆さんが実行に移すってところまで言葉にしてくださいました。嬉しかったです。やってよかったです。

金井

感じて、考える。普通はそこで終わりがちなものだけど、感じて考えて動くという、そこまで具体的に繋がりましたよね。

司会

アフターセッションで話し合ったことが日常に活かしていけたらいいですね。今日はありがとうございました。

(司会:こども環境会議スタッフ 光末 礼子)

DIALOG
IN THE
DARK

こども環境会議
ダイアログ・イン・ザ・ダーク

www.kodomokankyokaigi.jp
www.dialoginthedark.com

2008年4月1日発行

発行人／志村 季世恵 発行所／こども環境会議 『こどもつくる』編集部
TEL:04(2994)3288 FAX:04(2991)6088
埼玉県所沢市松葉町11-9 イカリヤビル2F

(C)こども環境会議・DID JAPAN

本誌の内容を無断で複写・複製することは、固くお断りします。

こどもつくる